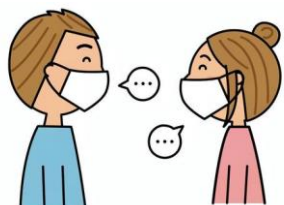


杉の子

奥多摩町立氷川小学校
学校便り 3月号
令和5年 2月28日発行



マスクは「顔パンツ」

校長 松井 良

厚生労働省は、3月13日以降のマスク着用の考え方について「個人の主体的な選択を尊重し、着用は個人の判断に委ねる。」と発表しました。文部科学省は、「4月から原則着用を求めない方向で調整する。」としています。ただし、今年度いっぱい卒業式を除いて、現行の感染症対策を継続することとしています。本校も、文部科学省、東京都教育委員会、奥多摩町教育委員会の方針を受け、感染症対策を継続していきます。

この3年間で、新型コロナウイルス感染症対策として、マスクの着用が日常化しました。3年間といえ、中学生や高校生はその学校生活すべてが含まれるだけの期間となります。入学してからずっとマスク生活を強いられた子たちは、クラスメイトのマスクを外した顔を知らないまま卒業を迎える子もいると思われます。これが、今年度中の感染症対策の継続における卒業式の例外を設けた理由でしょう。

マスク着用を個人の判断に委ねるとなった後も、「マスクを外せない」と考えている人は多いようです。「まさに、匿名のコミュニケーション社会が現実の社会にも到来することになる。」と問題提起しているのは、日本顔学会元会長で東京大学名誉教授原島博氏です。原島氏は、次のように言っています。

私は「もし顔がなかったら、人と人のコミュニケーションはどう変わるのか」と考えました。人の身体は衣服で隠されていても、顔は違います。相手の一番見やすいところに裸の顔があって、顔でもコミュニケーションしています。それが相手との信頼関係を築く上で大切なことでした。ところが、今、顔を見せないコミュニケーションが当たり前になりつつあります。その顔を見せないことを「匿名」をもじって「匿名」と名付けました。人は現実の社会では顔を見せながら行動しているのに、電話やインターネットでは違います。そこはまさに顔を見せない「匿名のコミュニケーション社会」です。顔は様々な情報を伝えています。真にコミュニケーションする上で必要な情報は、口から音声として発する言語的な情報だけではありません。人の顔は他の動物と比べて柔らかく、表情豊かにコミュニケーションができます。それによって言語では表現できない相手の気持ちを理解することもできます。共感して一緒に喜ぶこともできます。聴覚障がい者のコミュニケーション支援に関わる研究者は、マスクは聴覚障がい者の残された貴重なコミュニケーションのチャンネルを奪っていると言います。手話通訳者の方が聴覚障がい者に通訳している様子を見て納得しました。手話通訳者は指を動かすだけではなく、びっくりするくらい表情豊かに通訳するのです。そこには重要な情報がたくさん含まれているのです。聴覚障がい者が日常的にコミュニケーションするときも同様です。顔は貴重なメディアなのです。そのような特別な場合を除けば、マスクをしていてもほとんどコミュニケーションに困らないという人もいます。でも本当にそうなのか気になります。もしかしたら、人として必要なコミュニケーションができていないのではないか、社会的な距離のコミュニケーションはできても、相手の気持ちを理解して共感するという人としてのコミュニケーションはできていないのではないかと、気になります。

顔は衣服をまとわない自分のありのままを見せる場所です。自分を受け入れてもらえるという安心感があること、自分は自分でよいのだと思えること、自分の考えや行動に自信がもてることなど、様々な要件を備えることで、「顔パンツ」とも例えられるマスクを外して、のびのびと自分を表現できるようになるのでしょうか。私自身4月からは、必要時以外はマスクを外し、今まであまり見せることのできなかった笑顔で子どもたちを迎え入れ、安心して学校生活が送れるように支援していきたいと思います。



